Miyagi University Research Journal

本邦における老年看護学の発展と本学の老年看護学教育の課題と展望（その 2）
―コロナ禍後に向けて―

The development of gerontological nursing in Japan and the problems with and future prospects for gerontological nursing education at Miyagi university(part2): Focusing on the post-COVID-19 era

大塚眞理子，出貝裕子，沢田淳子，成澤健，徳永しほ
Mariko OTSUKA, Yuko DEGAI, Atsuko SAWADA, Ken NARISAWA, Shiho TOKUNAGA
宮城大学看護学群
School of Nursing, Miyagi University

【キーワード】
老年看護学，老年看護学教育，高齢者理解，体験学習，コロナ禍
gerontological nursing, gerontological nursing education, understanding the elderly, experiential learning, coronavirus crisis

【Correspondence】
大塚眞理子
宮城大学看護学群
otsukam@myu.ac.jp

【COI】
本論文に関して，開示すべき利益相反関連事項はない。

Received 2021.6.13
Accepted 2021.9.6

Abstract

In this paper, which is based on “The development of gerontological nursing in Japan and the problems with and future prospects for gerontological nursing education at Miyagi university (part 1): Characteristics of Gerontological Nursing Education,” we examined the current state of gerontological nursing education at Miyagi university as well as its problems and future prospects in the post-COVID-19 era.

Gerontological nursing education at our university is characterized by the following: experiential learning through interaction with elderly people; advanced classes on assessments using actual videos of a 101-year-old person based on the International Classification of Functioning, Disability and Health (ICF) conceptual model; a class format using a standardized learning cycle (prior and follow-up learning, provision of knowledge, group work, and individual work); goal-oriented nursing processes; and the use of electronic textbooks. Gerontological nursing practices are designed to foster the understanding of the characteristics of a variety of care facilities and that of the elderly people who reside in these facilities, development of basic practical skills required in gerontological nursing, and performance of nursing activities necessary for elderly people and their families.

Even during the COVID-19 pandemic, which began in 2020 and led to restrictions on learning, we were able to find new educational methods including the introduction of a learning cycle, the use of ICT, development of practical learning to foster the narrative-based understanding of patients, use of experiential learning and practical training with simulations, and provision of practical experience regarding community activities. These can also be effective in providing education in the post-COVID-19 era, and the implementation of these methods can contribute to the training of personnel who can shoulder the responsibilities of the kind of gerontological nursing the authors are aiming for. We would like to ensure flexibilities between lectures and clinical practices and improve the educational environment and faculty members’ educational competence in order to allow the utilization of these methods.

Miyagi University Research Journal

はじめに

「本邦における老年看護学の発展と本学の老年看護学教育の課題と展望（その 1）―老年看護学教育の特徴－」では，本邦における高齢者施策の変化と老年学における老年看護学の位置づけと発展を概観し，老年看護学教育の教育方法について，文献からその特徴を明らかにした。老年看護学教育の特徴は，学生の高齢者理解を深め，高齢者観を育み，高齢者ひとり一人のその人らしさに寄り添う姿勢を涵養する教育であり，そのために，青年期にある学生のレディネスに応じた多様な教材と実習形態を用いていた。

本稿では，本邦における老年看護学教育の特徴と対比しながら本学における老年看護学教育について，2016 年から 2020 年までを振り返り報告する。その上で，2020 年以降のコロナ禍の影響を踏まえて，本学におけるコロナ禍後の老年看護学教育の課題と展望を検討する。

本学の老年看護学教育

1. 大学教育としての看護教育

本学看護学群は，看護師等養成課程をもつ看護系大学である。保健師助産師看護師学校養成所指定規則（以下，指定規則）に従いつつ，本学の理念及び看護学群のカリキュラムポリシー，ディプロマポリシーのもとに大学教育としての独自の看護師・保健師・養護教諭（一種）養成の教育体系を構築［1］している。また，日本看護系大学協議会による「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」［2］を参考に，本学看護学群における看護実践に必要な 6 つの能力を学生に示し，「学びの振り返り」［3］として自己評価させている。

一方，宮城県は 2011 年の東日本大震災の被災県であり，本学の大学改革には地域復興支援が位置づけられている。2015 年には，「地域課題に応える確かな人材の育成拠点としての教育機能の強化と地域社会のニーズに対応した実学の研究を推進し，地域貢献を実現するための研究拠点としての役割強化」が大学改革の視点として示された［4］。そのため，本学の教育課程である基盤教育科目を充実させており，さらに看護専門科目へと円滑な接続をすることが課題となった。

2. 看護専門科目に位置づく老年看護学教育

1）科目構成と教育の継続性

本学看護学群の看護専門科目に老年看護学の科目は 4 科目設置されている。1 年次「ライフステージ看護学概論Ⅰ」（老年看護学概論），2 年次「老年看護援助論Ⅰ」（対象理解），3 年次「老年看護援助論Ⅱ」（看護過程の展開）と「老年看護学実習」が必修である。さらに，4 年次では老年看護学を希望する学生に「総合実習」「卒業研究」がある。

筆者らの前任者として，近年の本学の老年看護学教育の基盤を構築した小野は，老年看護学の授業のねらいとして，1 年次は「様々な視点からの高齢者の理解」，2 年次は「老性変化に伴う生活機能低下・障害の看護」，3 年次には「様々な療養生活の場における高齢者の看護，倫理的問題と解決及び看護の役割，施設入居高齢者の自然な最後の看取りと家族支援，紙上事例の看護過程の展開」としていた。3 年次の老年看護学実習については，「高齢者が療養している場の理解」「高齢者（と家族）を対象とした看護過程の展開，体験と老年観及び老年看護観の振り返り」を，4 年生の総合実習と卒業研究では「老年看護に関するキーワードを中心に据えた学生の自律的・実践的な研究活動」を目標としていた［5］。また，高齢者理解と老年看護実習の体験を通して学生の高齢者観，老年看護観を育成するものであった。この教育プロクラムは，高齢者にきき，高齢者とともに看護を創造する老年看護学を指向していると判断できた。筆者らは 2016 年度からこれを引き継ぎ，継続した老年看護教育を行っている。

2）大学改革を踏まえた老年看護教育の具体化

大学改革による本学の新しいカリキュラムは 2017 年度から開始された。全学的にシラバス内容の充実やルーブリックの導入，事前事後学修の提示などが行われるようになった。筆者らは，本学

の教学マネジメントのもと，これらに取り組んでいる。また，本学 LMS（Learning Management System）を用いてリアクションペーパーやレポート提出をペーパーレスで行っている。

筆者らは，基盤教育科目で取り入れられているアクティブ・ラーニングと地域に出向いて実際に高齢者から学ぶフィールドワーク（以下地域フィールドワーク）を老年看護教育科目運営に取り入れた。また，パソコン必携に伴う電子書籍［6］や大学の LMS を活用することにした。

3）老年看護学教育の動向を踏まえた新たな試み

筆者らは前述した老年看護学の理念・目標に則り，老年看護学教育の動向を踏まえて新たな教育を導入した。本学の老年看護学教育方法の特徴を表 1 に示した。

1 年次の授業に，地域自治会の協力を得て地域の元気な高齢者に来学してもらい，生活史や現在の暮らしの話を聞く交流会を開催した。これは，ライフヒストリー・インタビューを取り入れた健康な高齢者と直接かかわる体験学習であり，振り返りと学修の共有ではアクティブ・ラーニングを活用している。2 年次の授業でも，町の協力を得て地域の高齢者の活動に参加する地域フィールドワークを組み込んでいる。これらは，高齢者と年齢差が大きい学生に対し，高齢者理解を意図して早期から高齢者に直接関わる機会を提供する教育である。

本邦における老年看護学の発展と本学の老年看護学教育の課題と展望（その 1）－老年看護学教育の特徴で述べたように，基礎看護教育における老年看護学教育は，学生の高齢者理解が主たるねらいである。したがって，早期から段階的に高齢者と関わる本学の教育は意義のあるものである。

101 歳の高齢者の暮らしを実写した動画教材は，筆者らが開発したオリジナル動画であり，その活用成果は検証されている［7］。本学では 1 年次では生活史の学修に活用している。2 年次からは同じ動画教材を，国際生活機能分類（International Classification of Functioning, Disability and Health，以下 ICF）の概念モデルを用いたアセスメントと目標志向のアプローチ方法［8］［9］を組み合わせて教材化した。ICF は認知症介護で活用されており［10］［11］，本学では前任者らが老年看護学実習の記録用紙に取り入れていた。筆者らもこれを引継ぎ，授業で ICF を用いたアセスメントシートと看護計画シートによる看護過程展開学修を導入した。パソコン必携で電子教科書を導入したことから，学生一人一人の電子書棚にオリジナル動画を期限付き配信することができた。学生はオリジナル動画を見て，情報収集，アセスメント，看護計画の立案という学修を個人ワークとグループワークで行う。特に，高齢者を理解するためのアセスメント力の育成に力を入れている。動画教材と ICF の概念モデルを組み合わせた看護過程の学修教材は本学のオリジナルである。看護学教育への ICF の導入は，精神看護学［12］や在宅看護学の実習［13］で検討され試みられているがまだまだ少ない。ICF の概念モデルは，保健医療福祉の共通言語として作成されており，今後，多職種連携や地域包括ケアの中で必要になる。筆者らの取り組みは先駆的な教育と考えられ，今後も継承していく意義がある。

老年看護学実習では実習フィールドを増やし，地域包括ケアシステムの中で多様な療養の場を移動しながら暮らす高齢者と継続看護を学修する実習とし，専門職連携教育［14］を試行的に実習に取り入れた。看護の臨地実習で専門職連携教育を行う取り組み［15］は全国的に少なく，今後の発展が期待される。

学生の高齢者観の育成は，1 年次の体験学習や地域フィールドワークで学生に問いかけている。また，老年看護観の育成は，高齢者理解とともに老年看護の理念・目標を教授している。老人看護専門看護師が作成した，「目指す老年看護実践」の動画の視聴や，本学大学院看護学研究科を修了した老人看護専門看護師をゲストスピーカーに招き，老年看護の理念・目標と具体的実践を結びつけて話してもらっている。3 年次の老年看護学実習では自己の高齢者観と老年看護観を最終レポートにしている。

筆者らは，老年期を生きる高齢者の理解を深め，高齢者のその人らしさに寄り添い，高齢者とともにケアを創造する人材育成をめざしており，そのために様々な教育手法を取り入れてきた。体験学習やアクティブ・ラーニング，ICT（Information and Communication Technology）の活用，ICF の導入などにより高齢者理解とアセスメント力育成に力をいれている。

表 1　宮城大学の老年看護学教育方法の特徴

科目	高齢者理解	理念・目標の理解	アプローチ方法	行動（実践）力	学修力
1年次：ライフステージ看護学概論（老年期）	101歳歳高齢者の動画視聴による生活史の理解、地域自治会の協力で元気高齢者との交流	老人看護専門看護師が作成した「目指す老年看護実践」のスライド視聴		グループで高齢者へのインタビュー方法、高齢者とのコミュニケーション	電子教科書の導入、レポート作成にルーブリック導入
2年次：老年看護援助論 I	101歳高齢者DVDを活用した暮らしの理解、高齢者体験装具による高齢者理解、フィールドワークによる地域で暮らす高齢者の理解、	老人看護専門看護師が作成した目指す老年看護実践のスライド視聴とディスカッション	ICFの枠組みを用いた生活機能、個人因子、環境因子のアセスメント、高齢者疑似体験装具を用いた食事援助と手指衛生援助の演習	フィールドワーク、グループワーク、グループワークの成果発表	電子教科書使用、事前学修・個人ワーク・グループワーク・事後学習の学習サイクル導入、フィールドワークのルーブリック導入
3年次：老年看護援助論 II	2年次で使用した101歳高齢者が入院した想定で、入院治療をうける高齢者の理解	老人看護専門看護師（ゲストスピーカー）による講義、特養の看護管理者（ゲストスピーカー）による講義	ICFの枠組みを用いたアセスメントと目標志向による看護過程展開演習、センター方式を取り入れた記録用紙の改編、多職種連携の計画立案	入院した101歳高齢者の看護過程演習のグループワーク、グループワークの成果発表，東北医科薬科大学薬学部生との専門職連携教育（IPE）の試行	電子教科書使用、事前学修・個人ワーク・グループワーク・事後学習の学習サイクル導入、科目の学習指針としてルーブリック導入
3年次：老年看護学実習	対象特性実習として特養と外来の実習、看護過程実習として病院または老健実習、受け持ち看護の実施、IPEのモデル実習				グループ学習、実習体験のリフレクション、実習体験のプレゼンテーション
4年次：総合実習（老年看護学）	老年看護に関するキーワードを中心に据えた主体的自律的に実習計画の立案、進行管理、受け持ち看護の実施				文献検討、実習体験のリフレクション、学習内容のプレゼンテーション
4年次：卒業研究（老年看護学）	老年看護に関するキーワードを中心に据えた学生の自律的・実践的な研究活動				

4）教育実践の評価と課題

筆者らの教育実践の評価は，学生の成績評価に加えて，大学の教務運営の一環で学生による授業評価を受け，PDCAサイクルを回して改善を図っている。老年看護学実習では学生アンケートや実習施設指導者からのアンケートを基に授業評価を行い，改善を図っている。しかし，導入した教材や演習の評価，カリキュラム評価は十分とは言えない。電子書籍については，諸大学で活用と学修効果が報告されており［16］［17］，筆者らも評価する時期に来ている。動画とICFを用いたアセスメント及び目標志向のアプローチ方法の学修教材の評価や，高齢者との交流や地域フィールドワークなどの体験学習の評価，多様な実習フィールドを使った実習の評価など，老年看護学教育の評価研究が課題である。湯浅は，老年看護学教育の研究について，研究デザインと倫理的配慮の課題を挙げている［18］。筆者らの今後の課題は，教員が実感している教育効果を根拠づける教育研究に取り組み，教育方法として確立することである。そして，筆者らが目指す老年看護教育を普及することである。

限られた科目と授業時間のなかでさらに充実したい教育内容は二つある。一つは，高齢者の生活機能を観察しアセスメントする能力育成である。日本老年看護学会では，2007 年に高齢者のフィジカルアセスメントに関するワークショップを開催して議論しており［19］，高齢者のフィジカルアセスメントは老年看護学の重要な課題となっている。本学では，専門基礎科目である形態機能学や基礎看護学の看護援助技術論で基本的なフィジカルアセスメントは教授されている。本学老年看護学では，高齢者疑似体験装具を用いた演習を 2 年次に実施し，高齢者の運動機能や感覚機能の低下を体感し，活動・参加に影響することを学修している。また，101 歳のオリジナル動画を用いて，視覚的に高齢者の身体構造や運動機能などを観察しアセスメントしている。不足しているのは，高齢者の内部機能の観察とアセスメントである。触診や聴診などの手法は基礎看護学や成人看護学で学ぶことが可能であり，老年看護学では臨地実習の機会にそれらを応用したい。病院や高齢者施設で受け持つ高齢者の内部機能の低下と活動・参加を結びつけてアセスメントし，その人の健康状態を整える実践的学修を保証する必要がある。

もう一つは倫理教育である。山田は，未来の老年看護学教育に向けて，医療の場ではエビデンスに基づく医療が最善と判断され，高齢者の意思決定が蚊帳の外となっていることに警鐘を鳴らし，

卒業時到達目標にある「ヒューマンケアの基本的能力」として，老年看護学教育に倫理的な看護実践能力の育成を強く求めている［20］。本学では 3 年次の授業で，大腸がんが見つかった認知症高齢者の手術の有無について，医師と看護師の意見の相違，家族間の意見の対立を描いた動画教材を用いている。学生は白黒はっきりした回答を求める傾向があるので，あいまいさに耐える忍耐力，高齢者の立場に立ち人権を守ること，異なる意見の調和的解決方法の教育を強化する必要がある。

3. コロナ禍における老年看護学教育

1）本学での取り組み

2020 年からの新型コロナウイルス感染症のパンデミックは，看護教育にも大きな影響をもたらした。本学では，前期は遠隔でオンライン授業を行った。筆者らは，コロナ過であっても従来の授業や実習の到達目標を変えることなく，状況に応じて運営方法を工夫し，学生の学修を保障することにした。

前期開講の 2 つの授業科目では，電子教科書と 101 歳の動画教材を使い，講義内容をオンデマンド動画にして配信した。1 回の授業を，「事前学修・個人ワーク・集団学修（授業時間のうち 30 分間ライブでグループワーク）・事後学習」で構成した。この教授法はアクティブ・ラーニングの学修サイクルとなり，オンライン授業の効果が得られた［21］。しかし，遠隔授業で知識提供型からアクティブ・ラーニングに移行したにも関わらず，2020 年度後期に対面授業が可能になった時には，グループワークが思うようにできなかった。その理由は新型コロナウイルス感染症対策のなか，三密を避けた講義室という現在の環境がグループワークの障壁となってしまった。新型コロナウイルス感染症対策を徹底しながら，学生同士の相互作用を対面で創り出す学修方法の検討が課題である。

感染症対策は今後も継続し短期間では解決しない。感染予防と同時に対面による体験学修の検討は継続する課題である。

コロナ禍の老年看護学実習では，特別養護老人ホーム（特養）実習と外来実習ができず，病院実習も受け入れ制限があった。したがって，学生一人が体験できる臨地実習は数日であり，代替実習が必要となった。そこで 3 週間の実習期間に「臨地実習・学内演習・オンライン学習」を組み合わせた実習プログラムを作成した［22］。学内演習では，紙上事例を用いたシミュレーション学習［23］と，新たに開発した「INTO 特養」［24］を実施した。コロナ禍での実習プログラムは，少人数の学生グループを教員が受け持ち，きめ細かい指導を行った。従来よりも教員による振り返り学修（学生のリフレクション）が充実し，学生は実習目標を達成することができた。また，4 年次の総合実習では，病院や施設だけではなく，地域をフィールドにした老年看護学実習を行うことができた。

病院や施設で高齢者や看護師等に直接関わることで学べる内容と，事前学修や事後学修で学べる内容が明確になった。筆者らにとってコロナ禍での実習指導は，困難なことも多かったが，得られたことも多かった。

2）全国の老年看護学教育

医学中央雑誌 web 版で，「老年看護学」と「コロナ禍」をかけあわせて検索したところ，該当する文献は 7 件のみであった（2020 年 7 月 29 日検索）。2020 年 11 月から 2021 年 3 月発行の文献であり，このうち看護基礎教育の文献は 2 件であり，商業雑誌の特集「老年看護学の授業の最前線」に掲載されたものであった。老年看護学概論のオンデマンド授業と，グループワークをリモートで実施した成果報告［25］と，シミュレータを用いた模擬患者の看護計画実施・評価を行う学内実習報告［26］であった。

2021 年 6 月に開催された日本老年看護学会第 26 回学術集会の抄録集をみると，コロナ禍の老年看護学教育に関する発表演題は 7 件であり，いずれも臨地実習に関する教育実践報告であった。うち 4 件は本学からの報告［21］［22］［22］［24］であった。他 3 件は，高齢者施設での臨地実習の代替として実施した学内実習プログラムの紹介と成果報告［27］，オンライン活用の教育教材の開発とそれを用いた実習と成果［28］［29］であった。コロナ禍での老年看護学教育では，対面授業や臨地実習に制限がある中で，ICT の活用やシミュレーション学習による新たな教育方法

が開発され，教育の質を守る教育が行われている。

2021 年度も全国で新型コロナウイルス感染症の影響が継続している。医療現場の逼迫した現状もあり，看護学教育は時代の転換点にある。今後は様々な教育実践が開発・共有され，with コロナ，after コロナの看護学教育は新たなフェーズに発展すると思われる。

文部科学省では，「新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議」を開き，報告書をまとめた［30］。そこでは，ロールプレイやシミュレーション教育，経験のある地域住民を模擬患者として迎える学内実習，ヴァーチャルリアリティ（VR）を利用した実習などが紹介されている。そして看護実践能力を修得するうえで臨地実習の必要性と意義は明確であり，臨地でしか学べないことを明確にして実習施設と協働した教育を行うことが強調された。

本学の老年看護学実習でも，2020 年度の実習プログラムの成果を実習施設に伝え，状況に応じて臨地・学内・オンラインを組み合わせた実習を行っていくことになる。

本学の老年看護学教育における今後の課題と展望

1. 教育の継承と時代の要請

筆者らは，前任者らが築いてきた老年看護学教育を継承し，老年期を生きる高齢者の理解を深め，高齢者のその人らしさに寄り添い，高齢者とともにケアを創造する人材育成をめざして教育している。そして，高齢者施策や教育施策を反映させ，学生のレディネスに配慮しながら様々な教育手法を取り入れてきた。筆者らが取り組んできた教育は，時代に即したものであったと思われる。

2022 年から始まる指定規則改訂に基づく新カリキュラムでは，地域包括ケアシステムの構築と ICT の普及に対応できる人材育成や若い世代のコミュニケーション能力に着目している［31］。筆者らは ICT の活用について，2017 年から電子書籍を導入しデジタル教材を用いて授業をしてきた。当初は，「老年看護の授業だけが電子書籍なのはなぜ」「使い方がわからない」という学生の声もあったが，「電子教科書に書き込みができるのが良い」「自分なりの勉強方法が工夫でき，面白い」「携帯で電車の中で事前学修ができる」などの意見もあった。他の教科目になかなか広がらなかったが，コロナ禍で一変した。どの科目でもオンライン授業を経験し，何らかの ICT を使うようになった。老年看護学の授業では，パソコン画面に電子教科書とアセスメントシートの両方を開いて学修するなど，学生は様々な手法を駆使している。筆者らはコロナ禍でのオンライン授業でグループワークを試みて，体験型学修の手ごたえを得た。オンラインによるグループワークには賛否両論がある［32］［33］。ICT はあくまでもツールであることを念頭に，教員教育も含め，ICT を看護学教育に活用する教育環境づくりを組織的に行うことで，その活用・普及は可能と考える。ICT 活用は社会的要請であり，今後，初等教育から ICT 教育をうけた学生が増えてくる。オンラインコミュニケーションは，社会的スキル，対人スキルと正の関連があるという報告［34］があり，入学してくる学生のコミュニケーションの能力を判断して，レディネスに応じた教育方法を工夫する必要があり，ICT の活用は今後も課題である。

看護職は対人援助職であり，コミュニケーション能力は必須である。ICT を使ったコミュニケーション能力も必要であるが，患者と直接関わるコミュニケーションが不可欠である。特に老年看護では ICT に触れたこともない高齢者と直接関わることになる。筆者らが従来から導入している，入学早期からの体験学習や地域フィールドワークは，高齢者と直接関わる機会を提供しており，ますます必要な教育になる。さらに，臨地実習に出る前に，学内でロールプレイやシミュレーション学修を行ったうえで，臨地実習で高齢者と直接関わり，振り返り，コミュニケーション能力を養う教育が重要となる。高齢者と直接かかわるコミュニケーション能力の育成が課題である。

時代は，Society4.0 情報社会から Society5.0 未来社会に向かっている［35］。未来社会に求められる看護人材の姿については，今後の議論が課題となろう。

老年看護学教育では，老年期を生きる高齢者の理解を深め，高齢者のその人らしさに寄り添い，高齢者とともにケアを創造する人材育成をめざしている。この教育理念を見失わず，教育への情熱をもって，教育に取り組めば活路が見いだせると考える。

2. コロナ禍による社会変化への対応

2020 年，コロナ禍で制限が大きく先の見えない不安の中での教育活動は困難を極めた。そして，2021 年の今もそれは継続している。しかし，遠隔授業の実施によって大学教育のシステムとしても，各科目運営としても ICT 化が大きく進展した。筆者らの遠隔授業では，知識提供型から体験型学修への方向性が明確になり，新たな課題も見いだせた。臨地実習においても，臨地でしかできない体験学習と，それを補完する教育方法の開発を行うこともできた。コロナ禍での教育体験は教育変革の転換点となった。

従来から平時から災害時に備えた事業継続計画の策定の必要性が指摘されていたが［36］，教育の場でもこれを意識した取組が必要である。今回の新型コロナウイルス感染症対応についても同様である。日頃から感染症対策や災害対策の準備を行い，教育の継続性を保障することも課題として取り組んでいく。

老年看護学教育を担う筆者らは，老年看護学の理念・目標を見失わず，時代に応じた教育方法を取り入れ，創意工夫して高齢者の看護を担う人材を育てて行かなければならない。今後も本邦の社会情勢や高齢者施策の動向，老年学と老年看護学の最新の研究動向を注視し，教員自身が教育力を高め，本学の方向性と対応させて教育実践と教育研究に取り組んでいく。

AcKowledgment

本論文をまとめるにあたり，本学における老年看護学教育の基盤を創ってくださった元教員の方々に感謝申し上げます。特に小野幸子先生，河原畑尚美先生，細田（出井）理恵子先生，中込沙織先生に感謝申し上げます。なお，本研究に関する利益相反はない。

文献

［1］宮城大学履修ガイド（2021）看護学群，
https://www.myu.ac.jp/application/files/7016/1784/4824/web. pdf（最終アクセス 2021.6.10）

［2］日本看護系大学協議会（2018）．看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標，https://doi.org/10.32283/rep.5618b431（最終アクセス 2021.6.10）

［3］宮城大学看護学群（2020 ）．学びの振り返り第 5 版

［4］宮城大学将来ビジョンと大学の改革について https://www.pref.miyagi.jp/uploaded/attachment/318561.pdf（最終アクセス 2021.6.11）

［5］小野幸子（2015）．多死時代における看護学教育と看護実践の創造～老年看護学領域の立場から～，北日本看護学会誌，17（2），p. 1-5

［6］堀内ふき他（2019）．ナーシンググラフィカ老年看護学①高齢者の健康と障害，メディカ出版

［7］田中敦子，大塚眞理子，奥宮暁子，安川揚子，丸山優（2011）．超高齢者への関心と理解を促す視聴覚教材を用いた老年看護教育の検証．埼玉県立大学紀要，12，p. 41-47

［8］山田律子他編集（2016）．生活機能からみた老年看護過程+病態・生活機能関連図第 3 版，医学書院

［9］岡村絹代，樹神千尋，名和祥子，中野志保（2020），本学における老年看護学教育の現状と課題（第 1 報）老年看護学実習における目標志向型思考での看護過程の展開．朝日大学保健医療学部看護学科紀要，6，p. 69-73

［10］諏訪さゆり（2007）．ICF の視点を活かしたケアプラン実践ガイド，日総研出版

［11］認知症介護研究・研修東京センター（2011），三訂認知症の人のためのケアマネジメント　センター方式の使い方・活かし方，中央法規

［12］心光世津子，遠藤淑美，諏訪さゆり（2012）．精神看護実習に ICF（国際生活機能分類）の視点を導入する試み，精神科看護，39（5），p. 41-49

［13］牧理砂，又吉忍，鍋島純世，西村純子（2016）．在宅看護学教育における ICF の概念活用についての検討，椙山女学園大学看護研究，8，p. 15-22

［14］志田淳子，大塚眞理子，佐藤可奈他（2019），看護学生が認識するクリニカル IPE の効果および課題の明確化―同じフィールドで行われている他大学薬学部との IPE の試み―，日本看護科学会誌，39 , p. 1-9

［15］井出成美，朝比奈真由美，伊藤景一，関根祐子，石川雅之，臼井いづみ，酒井郁子（2018）．千葉大学 クリニカル IPE：大学病院における医・薬・看の診療参加型 IPE，保健医療福祉連携，11（2），p. 123-130

［16］田中雅章，神田あづさ，内田あや（2017）．電子書籍配信サービスによる電子教科書と電子教材の運用．第 14 回情報プロフェッショナルシンポジウム予稿集，
https://www.jstage.jst.go.jp/article/infopro/2017/0/2017_77/_pdf/-char/ja（最終アクセス 2021.6.11）

[17] 東海幸恵，後藤忠彦，田場大輔（2010）．電子教科書を用いた学習の行動分析，イメージ，学習の変化等の評価方法の 研究（1）．日本教育情報学第 26 回年会，2010file:///C:/Users/marik/Downloads/digidepo_10406740_po_ART0009566125.pdf

[18] 湯浅美千代（2015）. 看護教育の立場からの意見：この 20 年を振り返って（日本老年看護学会会員の立場から，老年看護学会誌，20（1），p. 59-63

[19] 山本則子（2008）. 高齢者のフィジカルアセスメント：日本の高齢者看護のためのフィジカルアセスメントの枠組みをつくりましょう. 老年看護学会誌，12（2），p. 83-88

[20] 山田律子（2015）. 未来の老年看護学教育に向けて. 老年看護学誌，20（1），p. 54-58

[21] 徳永しほ，出貝裕子，成澤健，大橋幸恵，大塚眞理子（2021）. コロナ禍における老年看護学のオンライン授業の取組―教員の振り返りから見えてきたこと―，日本老年看護学第 26 回学術集会抄録集，p.213

[22] 成澤健，出貝裕子，沢田淳子，徳永しほ，大橋幸恵，大塚眞理子（2021）. コロナ禍の老年看護学実習における実習プログラムの検討―従来の実習目標の達成を目指して―，日本老年看護学第 26 回学術集会抄録集，p.212

[23] 大橋幸恵，出貝裕子，沢田淳子，成澤健，徳永しほ，大塚眞理子（2021）. コロナ禍の老年看護学実習に学内シミュレーションを取り入れた成果―教員の振り返りからみえたこと―，日本老年看護学第 26 回学術集会抄録集，p.218

[24] 沢田淳子，徳永しほ，成澤健，大橋幸恵，出貝裕子，大塚眞理子（2021）. コロナ禍における高齢者の特性を捉えるための学内実習プログラム―「INTO 特養」開発と実施―，日本老年看護学第 26 回学術集会抄録集，p.216

[25] 牛田貴子（2021）. コロナ禍における老年看護学概論の講義における工夫 / オンデマンド授業とグループトーク機能を用いたグループワークの実際と成果，臨床老年看護，28（1），p.43-47

[26] 飯室淳子（2021）. コロナ禍における学内実習の実際　シミュレータ（一般的全身型モデル人形）を用いた模擬患者への看護計画実施・評価，臨床老年看護，28（1），p.56-62

[27] 平原直子，中島洋子，葛原誠太，西村知子，床島正志他（2021）.「老年期にある人と総合的に理解する」ため学修プログラムの成果―コロナ禍での老年看護学実習（学内実習）の取り組み―，日本老年看護学第 26 回学術集会抄録集，p.221

[28] 田中貴大，深堀浩樹，田所良之，平尾美佳，真志田祐理子他（2021）. 大学間連携によるオンラインで行う老年看護学実習のための教材開発，日本老年看護学第 26 回学術集会抄録集，p.217

[29] 田所良之，田中貴大，福澤知美（2021）. 認知症高齢者仮想事例教材を用いた同時同方向オンライン老年看護学実習の実践報告，日本老年看護学第 26 回学術集会抄録集，p.223

[30] 文部科学省（2021）. 新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議報告書，https://www.mext.go.jp/content/20210608-mxt_igaku-000015851_0.pdf（最終アクセス 2021.6.10）

[31] 厚生労働省（2019）. 看護基礎教育検討会報告書 .https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf（最終アクセス 2020.6.11）

[32] 松下幸司（2020）. 大学の遠隔講義におけるアクティブラーニング型授業の試み―グループ・コミュニケーション・ルームと情報共有ツールを併用して―，香川代諾教育実践総合研究，41，p.89-98

[33] 上田昌宏，安原智久，串畑太郎，栗尾和佐子，曽根智道（2021）.Small　group discussion はオンラインで代替可能か?，薬学教育，5，p.1-7

[34] 石川真（2020）. 円滑なオンラインコミュニケーションを実現するためのスキルに関する研究，上越教育大学研究紀要 .39（2），p.247-255

[35] Society5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会新たな時代を豊かに生きる力の育成に関する省内タスクフォース（2018）.Society5.0ni 向けた人材育成 ~ 社会が変わる，学びが変わる，https://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/detail/__icsFiles/afieldfile/2018/06/06/1405844_002.pdf（最終アクセス 2021.8.24）

[36] 内閣府（2013）. 事業継続ガイドライン－あらゆる危機的事象を乗り越えるための戦略と対応－，http://www.bousai.go.jp/kyoiku/kigyou/pdf/guideline03.pdf（最終アクセス 2021.8.27）